

館報 教育記念館

No. 85
平成27年10月 発行

きらめき未来塾 思考道場



きらめき未来塾 右脳活用道場



第6回
「児童生徒による
ものづくり展」



主な内容

- ◎教育時評 富山県小学校長会 会長 山瀬 敬 2
- ◎第25回 郷土の先賢顕彰者 伊東森作・松沢謙二 3
竹内源造・継続顕彰者
- ◎特別展 「肖像画で見る郷土の先賢」 6
- ◎恒例展 「第6回児童・生徒によるものづくり展」
- ◎恒例展 「第13回さんすうワールド展」 7
- ◎「きらめき未来塾」 お笑い道場 右脳活用道場 思考道場
- ◎元気な地域づくり活動を行う人材の育成及び支援事業
・平成27年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業
- ◎恒例展「第12回子どもの目 自然不思議発見写真展」 8



発行所／公益財団法人 富山県ひとつくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町 1-5-1
TEL (076) 444-2000 FAX (076) 444-2001 E-mail: toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
(教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076) 433-2770)
発行人／富山県教育記念館 館長 伏黒 昇 印刷所／いおざき印刷株式会社



時代に学ぶ

富山県小学校長会

会長 山瀬 敬

国の教育改革は、短期間のうちに次々と答申が出され、具体化に向けて大きく動き始めている。いま、私たちが最も考え、実行しなくてはならないことは、学校、保護者、地域がしっかりスクラムを組んで連携する小さな自前の教育改革の積み重ねではないだろうか。

私が勤める学校は、来年4月から3つの学校が統合し、新しい学校となる。新しい学校の創立に関われることは、身の引き締まる思いであり、大きな喜びを感じる。

1年前から、統合に関する様々な課題について3校の教職員で協議を重ねてきた。生活のきまり、教育課程、学校行事といったことはもとより、学校のあるべき姿、経営方針、何を目指し授業するかなど、できる限りその本質に迫るよう掘り下げて議論をしてきた。その取組を通して思うことが3つある。

- ・何より、教育に携わってきた諸先輩は、確固たる教育信念のもと、誠実に「当たり前」の事をしっかりできる」ようにやってきたのだと強く思う。これまでの富山の教育は決して間違っていなかった。変えてはいけないことがある。しかし、時代に対応し、変わるべきこともある。
- ・小さな改革の積み重ねには、一にも二にも校長の覚悟と努力が必要である。校長が変われば、教員も変わる。教員が変われば、子供も変わる。学校の姿勢を、校長が先頭に立ってしっかり創り上げ、それを保護者や地域、さらに未来の保護者に向かってしっかりと宣言し実行することが、学校経営に必要な時代になった。
- ・本来、教育は時代、そして社会や経済、思想と密接な関係にあるはずである。しかし、私たちはその関係に疎いのではないか。もっと知る必要があり、もっともっとそこから学ぶ必要がある。

例えば、私たちの生活と切り離すことができない「インフラ（※）」。

高度成長期に作られた橋や道路などのインフラが次々と補修時期になっており、その管理が非常に難しい状況にある。インフラのトラブルが起きるのは、「隙間」だという。つまり、みんなの目、注意が行き届かない所。あるシステムの中で、少しずれている部分、不連続な場所が弱い。自然がそのような弱いところを突いたとき、事故が起こるといふ。

ある科学季刊誌の中で土木工学の専門家藤野陽三さん（横浜国立大学上席特別教授）がインタビューに答えて次のように述べている。

『既に未来のインフラに必要なものが研究されている。インフラ自体が自身の異常を感じる「フィードバック機能」を持つ、応力発光体という素材が実用化間近だという。つまり、構造物に負荷がかかって亀裂ができる前に、負荷の大きい場所が色が変わるといふ仕組みである。』

なんということか、インフラの世界は未来に向かって動いているのである。私たちが教育における社会や人との関わりのずれや摩擦の異常を感じ、それを補正していこうとする審美眼をもっと磨き、教育の機能や役割を構築する必要がある。

教育は国にとっては百年の大計であり、親にとっては一大事業であり、教師にとっての日常である。子供たちの将来を創造する礎を築く教員として、時代の流れを感じるとともに、理念と信念をしっかりと抱き未来を育むという誇りと自信、そして責任をもって励んでいきたい。

※インフラ＝インフラストラクチャーの略：「見えない」「下部構造」「社会に直接利益は生まないが、それがあって皆が生活でき、富を生めるもの」

第25回 郷土先賢室顕彰者紹介



黒部西瓜の品種改良と流水客土の実現に 力を尽くした農業技術者

伊東 森作 (1897~1997)

伊東森作は、明治30年(1897)に下新川郡大布施村(現黒部市大布施)に生まれた。

大正後期、三日市付近では丸型の黒部西瓜が栽培されていたが、奈良の大和西瓜に押され、売れなくなっていた。この窮状をみた森作は、農家の生活を助けたいと考え、大正12年(1923)から品種改良に取り組んだ。昭和6年(1931)、ようやくできた「新黒部西瓜一号」は、西瓜品評会で一等となったが、病気に弱くて収量も少なく、実用品種としての価値はなかった。森作は、その後も品種改良を続けたが、過労から病に倒れてしまった。結果を出せず改良を中止することに涙する森作は、入院を前に西瓜畑を見に行き、偶然カラスにつつかれ穴の空いた西瓜を見つけた。それほどおいしい西瓜であると察した森作は喜々として採種した。退院後、以前にも増して品種改良に取り組み、昭和13年(1938)、病気に強い「新黒部西瓜七号」の開発に成功した。西瓜の改良を志してから16年目のことであった。

昭和14年(1939)から郡農会(現農協)技師となった森作は、戦時体制として国を挙げた食糧増産のため来県した農林省の担当者の指示を受け、黒部川扇状地の宿命と言われた砂質浅耕土と冷水かけ流しの改善を考えるようになった。ちょうどその頃、東京帝大の塩入博士の研究の結果から、客土によって15~20%も多く収穫できることが分かった。しかし、問題はどのようにして事業化するかということであった。

昭和16年(1941)、森作は宇奈月の医師藤田与次に「わしの爺は土のない新屋村の石河原を拓き、そこへ泥水を一年中流し込んで千歩もある田圃を何十枚もつくったものだ」と聞き、実際の「泥流し」を見た。この時森作は、「赤土を泥水にして用水へ流し、水田まで運ばよいのではないか」というアイデアを思いつき、「流水客土」と名付けた。その後、魚津市木下新で実地試験を実施したが、終戦まで試験は思うようにできなかった。

昭和22年(1947)、一介の農業会技師に限界を感じた森作は、黒部川扇状地での流水客土を実現しようと県議会議員に立候補し当選した。森作は農林委員となり、流水客土の事業化に一途に取り組んだ。高松宮殿下産業視察の際には、流水客土の試験田を視察していただくという手段を講じた。それを見た下新川郡新屋村長袖野与太郎は、この事業こそ村を救う道であると考え、昭和24年(1949)7月、黒部川流水客土促進期成同盟会を結成。森作らの非常な努力の結果、日本初の流水客土が県営事業となった。

昭和26年(1951)に着手した流水客土は、昭和36年(1961)3月に完了した。米の収穫後の限られた時期に水圧ポンプで粘土を掘り削り、機械で微細にした泥水を全耕地に灌漑した結果、水田は保水力が改善されて水温が上がり、冷害が減少した。また、客土によって鉄分が多くなり秋落ちが減少、収量も増加した。

森作は、その後富山県農業会議事務局長、黒部市教育委員等を歴任。また、これまでの功労から褒章も授与された。晩年は「落葉樹は山を肥やす」の信念から、櫟の研究を進め、自ら育てた櫟を中国湖南省に送り、植樹した。平成9年2月死去。享年99歳、農民の生活をよくしたいとの信念を貫いた生涯であった。

平成27年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



富山を慕い続けたノンフィクション作家

辺見 じゅん (1939~2011)

辺見じゅんは、昭和14年(1939)、角川書店を創業した角川源義と鈴木富美子の長女として、中新川郡水橋町(現富山市)に生まれた。本名、角川真弓。

水橋で6歳まで祖父母に育てられ、このとき聞いた民話のおもしろさが、後に民話の聞き書きへとつながった。高校時代には文芸会を結成し同人誌を創刊した。文学への憧れを深め、自分の行くべき道が文学しかないことを自覚していった。

辺見の文学は、民話や昔話の聞き取りから出発した。関係者一人一人を訪ねて丹念に、やがて相手にとって“母”のような存在として聞き取った。昭和51年(1976)、「呪われたシルク・ロード」が、第7回大宅壮一ノンフィクション賞の最終候補に残ったが、落選だった。平成2年(1990)、「収容所(ラーゲリ)から来た遺書」で同賞を射止めた。

1970年代後半、各地を訪ね「ふるさと幻視行」等聞き書きを生かした作品を発表し、その途上で、昭和54年(1979)頃から戦艦大和の生存者を訪ねる旅を始めた。これが「男たちの大和」(1983)に結実する。辺見はこのときの聞き書きについて、対談で「だんだん母親のようになって聞くという不思議な気持ちにさせられました」と語っている。

辺見は短歌会を富山で始め、月1回指導に当たった。平成19年(2007)には「弦(げん)短歌会」を設立し、富山発の短歌文芸誌「弦」を創刊した。平成14年(2002)2月、「幻戯(げんぎ)書房」を東京都千代田区神田に設立した。晩年の源義の出版への思いを引き継いだのであった。

平成22年(2010)、「高志の国文学館」館長就任が内定。平成23年(2011)9月、東京都の自宅で脳出血のため急逝、享年72歳。開館10か月前であった。故郷富山への思慕を詠んだ辺見の歌碑が来館者を迎えている。



アリアンサ富山村創設の父

松沢 謙二 (1901~1963)

松沢謙二は、明治34年(1901)中村慶治の次男として金沢市に生まれた。父の勤めの関係で県立富山中学校(現県立富山高等学校)に入学。大正11年(1922)東京帝国大学(現東京大学)農学部農学実科卒業、同年、農商務省(現農林水産省・経済産業省)農事試験場に勤務した。大正14年(1925)福野農学校(現県立南砺福野高等学校)の教諭となり、専門の蔬菜学の他に土壌学・肥料学を担当した。クマさんの愛称で親しまれ、温厚で実直、しかも人情家であった。

当時の県知事白上佑吉は、ブラジル移民に熱心で、県内の政財界人に呼びかけて昭和2年(1927)、富山県海外移民協会を設立し、アリアンサに約3250haの土地を購入し、移民の募集を進めていた。かねてから「将来の日本は海外に進出しなければならない」との主張をもっていた謙二は、この移住計画に心動かされ、いち早く協会幹事に応募し、その情熱を知った知事から協会幹事を委嘱され、現地責任者として先発派遣されることとなった。

謙二は、高岡市新横町の松沢松次郎の養女玉喜と結婚し、昭和2年(1927)松沢籍に入る。玉喜は小学校に勤める傍ら福野町(現南砺市)の柴田病院に通い、救急看護と助産学を身に付け、アリアンサでは貴重な存在となった。同年6月、富山村建設の先発隊として松沢夫妻はじめ4家族11名が「さんとす丸」で神戸港を出港し、サンパウロ州ミランドポリス市第三アリアンサ地区に入植した。

信濃海外協会の協力を得て事業に着手するが、想像を絶する未開の原始林の開拓に心身ともに疲れ、加えて謙二は、入植者受入責任者としての過酷な日々、マラリアに侵されながら業務を進めた。昭和3年(1928)第1回移民24家族121人がアリアンサに到着するも、予想外の荒野に失望しその責任を謙二に問う声も多く、その説得に精力を使い果たした。県や協会が移民を募集した際の案内文には「4, 5年苦勞すれば一財産できる」との謳い文句があり、それを信じ富山で資産を処分し渡航費用に充てた人がほとんどであった。当時の日記には「県での無法な宣伝に驚く」と悲憤する記述や、「経営資金オクレ松沢神経衰弱猛烈、申訳ナケレドヤメタシ松沢」の電報を打ったとの記述が残されている。県からの送金は数年を経ずして途絶え、建設資金は極端に不足し、開拓を滞らせる原因となった。

入植者は、謙二の説得に応じて開墾を終え、コーヒー・とうもろこしなどの栽培に精を出し、数年かけてようやく安定した生活に入った。アリアンサ富山村への入植は、昭和12年(1937)までに141家族531名にのぼる。謙二は、入植翌年には仮校舎を開設、昭和6年(1931)本校舎・図書館を作り学校教育の途を開くなど建設に尽くした。しかし、彼の勤める富山移住事務所は窮乏の悪化の一途をたどり、昭和8年(1933)ついに閉鎖となった。その後は、一開拓民として、牧場の管理人、農耕の手伝いなどで生計を立てたが、マラリアの再発で病床につくことが多く、昭和38年(1963)に苦難の一生を終えた。享年62歳。

昭和39年(1964)、海外移住功労者として、富山県知事表彰を受けた。

平成27年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



不屈の精神で世界一の製鉄業を目指し地域振興に尽くした実業家

大谷 竹次郎 (1895~1971)

大谷竹次郎は、明治28年(1895)小作農であった父次兵衛、母いとりの次男として、西砺波郡正得村(現小矢部市正得)に生まれた。17歳で上京し、力士の夢を諦めた後、兄と共に町工場で働いた。これが実業家としての第一歩である。

軍需景気に乗り、また災害を乗り越えた結果、兄弟で経営する東京ロール製作所は業績を大きく伸ばした。そして、昭和9年(1934)、兄の命を受け尼崎市に工場を建設し、竹次郎単独による事業経営が始まった。

竹次郎の夢は、高炉を造ることだった。日本で高炉がある製鉄所を完成させたが、軍の命令で火入れを見ることはなかった。また、戦後再び高炉造りに挑戦したが実現できなかった。しかし、電気炉においては世界一を成し遂げた。昭和電極(現SECカーボン)は、昭和37年(1962)に世界最大の電気炉に用いる24インチの太物電極の製品化に成功し、太物電極のパイオニアとして今日でも世界から高い評価を受けている。

このように竹次郎は、多くの会社経営に携わり、日本の製鉄・鉄鋼業をリードした。また、常におごらず質素に生活し周り人々を大切にしていた。その思いは、生まれ育った小矢部市や西宮市の地域振興にも表れている。

不屈の精神で世界一を目指し、度重なる困難を乗り越え、資産を地域振興に役立てた大谷竹次郎は、昭和46年(1971)11月、76年の生涯を静かに終えた。



小杉左官の名工（鏝絵）

竹内 源造 (1886~1942)

竹内源造は、小杉左官として県内各地の左官工事に携わった竹内組五代目の竹内勤吉の五男として、明治19年（1886）、射水郡小杉三ヶ村（現射水市三ヶ）に生まれた。竹内家は、江戸時代後期の文政年間に活躍した初代勤兵衛以来、左官職人の家系であった。父や家業を継いだ兄たちの姿を見て左官業を志し、小学校卒業と同時に左官職人になった源造は、明治34年（1901）、15歳で初代東京帝国ホテル貴賓室の漆喰彫刻を仕上げるなど、若い頃から才能を発揮し、明治44年（1911）には、25歳で射水郡役所から「一級漆喰彫刻士」として認定された。

大正5年（1916）、父勤吉が没すると竹内組を引き継ぎ、富山県西部を中心に、寺社・土蔵・銀行・公共建築など多くの左官仕事を手掛けた。客の注文に応じて鏝絵と呼ばれる漆喰彫刻を施した。

源造は、寺社建築の蛙股や雲形、懸魚などの装飾物の図解が書かれている「諸職絵様雛型」をはじめ、和風の人物画が描かれている本や現在の動物図鑑のような本を参考して鏝絵を製作した。また、50枚あまりの日本国内や世界の地図を持っていた源造は、富山県内だけではなく世界に目を向け、大正8年（1919）には、弟子や仲間20人余りを引き連れて海を渡り、現在も中国大連市にある旧朝鮮銀行大連支店の建築に携わった。この建物は現在、中国工商银行中山広場支店となっており、大連市重点保存建築に指定されている。

源造は、面倒見が良かった反面、職人気質が強く、弟子たちにも肝心な技術はなかなか教えることがなかった。また、思い通りに仕上がらなかった作品を何度も何度も打ち壊したという。漆喰彫刻だけでなく普通の壁塗りの仕事においても、4人分の仕事を1人で仕上げるほどの腕前であったと伝えられている。

源造作品の魅力は、何と言ってもその迫力にある。名越家（砺波市宮森新）の土蔵軒下の二頭の龍と波しぶきはその代表作である。日本最大級の長さ18m、高さ1mの白壁に、龍と龍が凄まじい迫力で対峙している。土蔵を飾るのは龍だけでなく、鳥や松、花を施し、基礎部分はわざと石に似せた模様仕上りといった造形で、当時の最高の技術が示されている。また、塗厚を1.5cmぐらいにして乾燥するたびに3回から6回ほど重ねて塗り、龍の鱗も一枚一枚隆起させて装っている。手間を惜しまないこの土蔵の鏝絵は、およそ数年かけて仕上げたものと考えられている。壁から60cm余りも飛び出た旧小杉町役場庁舎（現竹内源造記念館）の「鳳凰」など、「絵」というよりも「彫刻」に近い立体的な造形となっている。源造作品の多くは、目にガラス片や電球などを仕込んだ玉眼としている。また、射水市大江の永森神社にあるニューカレドニアからの帰還者が奉納した絵馬には、彼らが持ち帰ったニッケル鋼を埋め込むなど、技術的に優れるだけでなく、斬新な発想に富んだ作品を多く残している。

源造は、裕福ではないにもかかわらず20人を超える弟子を抱え育て、旅人が訪ねてくると腹いっぱい食事をさせ、誰でも家に寝泊まりさせるような人情味の厚い人物でもあった。

昭和17年（1942）5月12日、外出先から帰宅するなり脳溢血で倒れ、半日後に逝去した。享年56歳。

平成27年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



自由民権運動の先覚者

稲垣 示 (1849~1902)

稲垣示は、嘉永2年（1849）、射水郡棚田村（現射水市棚田）の豪農稲垣又平の長男として生まれる。14歳で金沢藩校壮猶館へ入り、19歳には小杉郡奉行所指揮官射水大隊司令官となった。「支配なき後は有力農民や商人から選ばれた有志が、維新期の行政を担わねばならない。そのためにはまず学問を修め、新しい時代の方向を知らねばならない」と考え、高岡の野上文山に入塾、一時は小学校教員となるがほどなく父病気のため家業を継ぐこととなり、寺子屋教師を傍らに自由民権運動の同志と糾合し、率先して政界に身を投じていくことになった。

明治12年（1879）板垣退助の民権運動に呼応し、「人民に自由の何たるかを知らせ、天から与えられた権利に目覚めさせることが何よりの急務である」と遊説した。翌13年、「北立社」を結成し、各県からの国会開設の請願が却下される中、4度、太政大臣の手に渡すように迫った。この熱意は他県の有志にも知られるところとなり「越中の自由は射水の森より」と言われるようになった。明治15年（1882）「北立自由党」を結成し、「北陸日報」「自由新論」「自由新誌」を発刊したが、明治新政府によって弾圧され廃刊となる。明治16年（1883）、高岡瑞龍寺で北陸7州有志大懇親会を開催したが、官憲の弾圧は厳しさを増し北立自由党は解党、明治18年（1885）には大阪事件で逮捕され、禁固5年の刑に服した。憲法発布の大赦により出獄後、「北陸公論」を刊行、明治27年（1894）第2回衆議院選挙に出馬し最高点で当選、第3回にも当選した。また、田中正造の足尾銅山公害糾弾の応援をしたり、「普通選挙期成同盟」を共同で結成したりと活躍の場は全国に広がっていった。

明治35年（1902）第7回衆議院選挙投票日前日、応援演説後めまいに襲われ急逝した。自由民権運動の先駆者、享年53歳だった。

特別展

「肖像画で見る郷土の先賢」

4月10日(金)～5月24日(日)



郷土先賢部会では、昭和62年から、135名の先賢を顕彰してきました。今回は、初期の頃、置県百年記念事業として描かれ肖像画の中から、社会・経済分野の21名を展示しました。

郷土先賢部会 顧問：中村啓志

専門員：松本 純、平野 強、福田 暁、松井功一、中山 均、根塚昌志、松田啓宏

恒例展

第6回「児童・生徒によるものづくり展」

6月12日(金)～7月12日(日)



県内には、伝統的、創作的な作品の製作に取り組んでいる小・中・高等学校が多くみられます。教育記念館では、発表の場のひとつとして「児童生徒によるものづくり展」を開催しています。

今年も200点の作品が寄せられました。来場者はじっくりと作品を鑑賞し、作品の多彩さに驚いたり、技術の高さに感心したりしていました。

恒例展

－クイズ&パズル－ 第13回 さんすうワールド展

7月25日(土)～8月23日(日)



夏休み期間中に算数の面白さを味わってもらおうとクイズや立体パズルを展示しました。

訪れた人たちは、暑さを忘れ考える楽しさを味わっていました。

きらめき未来塾 (夏休み期間中)

お笑い道場 講師 安野屋 仁楽齋
(社会人落語家)

右脳活用道場 講師 森 みちこ (漫画家)

思考道場 講師 舟木麻衣、馬場 剛
宮本亜貴子、金森 豊
滝脇裕哉



お笑い道場

元気な地域づくり活動を行う人材の育成及び支援事業

平成27年度「学ぼう！ふるさと未来」支援事業 (助成対象校 1校に10万円助成)



26年度 やな場で(射水市立金山小学校)

助成校

入善町立ひばり野小学校
富山市立岩瀬小学校
富山市立船嶺小学校
砺波市立庄東小学校
南砺市立福光東部小学校

「子どもの目・自然不思議発見写真展」

9月4日(金)～10月4日(日)

自然への興味や関心の芽が育つことを願い、子供たちが自然界の不思議を撮影した写真の展覧会を実施しました。今年は102点の応募がありました。



クモの芸術作品 (4年)



トマトのつゆ (1年)



うめの実を守るぞ (5年)



空からの光のカーテン (5年)



とびたて (6年)



おしょくじ中にせっきん (2年)



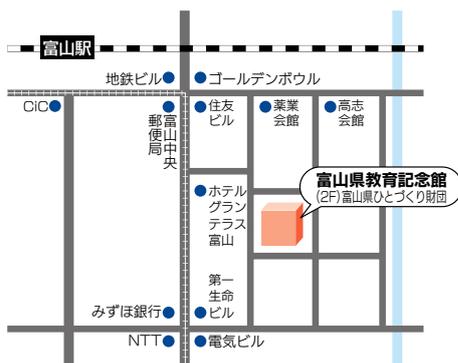
メロンのグリーンカーテン (2年)



春になったよ富士山 (3年)

これからの展示予定

- | | |
|------------------------|---------------------|
| ・ 特別支援学校 みんながんばってます作品展 | 10月30日(金)～11月15日(日) |
| ・ 富山県造形教育作品展 | 11月21日(土)～12月6日(日) |
| ・ 「アイデアロボットフェスタ」ロボット展 | 12月12日(土)～1月17日(日) |
| ・ 富山県中学校美術展 | 1月29日(金)～2月14日(日) |
| ・ 富山県版造形教育作品展・秀作回顧展 | 2月26日(金)～3月27日(日) |



あ・と・が・き

亜熱帯を思わせる猛暑や豪雨だったこの夏ですが、記念館は、39年目の老冷房機フル稼働で、きらめき未来塾やさんすうワールド展などの事業を何とか無事終わることができました。

この館報がお手元に届くころには、郷土先賢室での新しい顕彰展示が始まっています。どうぞ、富山県教育記念館へお出かけください。